

CONTENTS:

- P1 FD、次のステージへ
P2 FDフォーラムを開催しました!
英語クラス(教職員対象)を開講しました
P3 FDフォーラムに参加して
P4 2012年度後期授業アンケート結果報告

大阪工業大学FD委員会

FD、
次のステージへ

教務部長 益山 新樹

人と組織の関係について、よく語られる一つのフレーズがあります:

“One for All, All for One”

ご承知のように、ラグビーのチームプレイ精神を端的に表現する短い言葉ですが、いくつかの解釈があるようです。多くの方は「一人はみんなのために、みんなは一人のために」と認識されておられるかと思いますが、「一人はみんなのために、みんなは勝利のために」と捉えているラグビー関係者が少なからずおられます。すなわち、All for OneのOneは「チームの勝利」を指す、というわけです。

先日開催した第16回FDフォーラムで、京都大学の塚雄作先生が「FDとは教員に均質化を押し付けるものと誤解されている向きがあるようですが、教員の個性を活かしながら教育改善を進めることが必要です」とお話しになり、深く頷いておられる聴講者が多数おられました。その時、私の脳裏には“…、All for One”のフレーズが浮かびました。青臭いと感じられることを承知の上で申しますが、「教職員一人ひとりには工大のために、教職員の個性を活かしたFDは工大の勝利、すなわち、工大の持続可能な発展のために」という精神でFD活動を推進するべきであると、あらためて感じたのです。このスタンスに立ち、私は教務部長としての職責を果たしてまいりたいと考えております。

先の大塚先生のご講演では、昨年8月28日付中央教育審議会(中教審)答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」にフォーカスして話題をご提供いただきました。改めて申すまでもなく、大学運営に対して中教審答申は看過できない大きな影響力を持っております。今回の答申の教務事項に関するポイントは、学士課程教育における学修時間の実質的な増加・確保を図ることであり、そのために 1)教育課程の体系化(配当科目の精選・体系化、科目名ナンバリング); 2)組織的な教育の実施(教員間での連携と協力による授業内容の精査); 3)授業計画の充実(シラバスは授業の工程表として機能); 4)全学的な教学マネジメントの確立(学長のリーダーシップの下、大学教育のPDCAを展開)、等の方策を講じること、というかなり踏み込んだ内容となっています。

さらに、大学が速やかに取り組むことが求められる事項として、(ア)学長を中心とするチームを構成し、学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針、学修成果に係る評価の基準(学修行動調査、学修到達度調査、ルーブリック、学修ポートフォリオ等の具体的な測定手法の明確化)について、PDCAの確立という観点から相互に関連づけた情報発信に努めること。教育課程の策定では、教員が個々の授業科目の充実にエネルギーを投入することを可能とするように授業科目の整理・統合と連携を図ることが求められる; (イ)「プログラムとしての学士課程教育」という基本的な認識の共有や教育改善に資する充実したFDを実施する。そのために、専門家の養成や確保、活用を図る; (ウ)学部等の縦割り構造を超えて学士課程教育を機能させるために、教員だけでなく専門職員の育成と教育課程編成への組織的参画が求められる、と記されています。

このように列挙しますと、私自身も堅苦しさを感じます。しかし、大学の喉

元に突きつけられた匕首とも言える答申内容を教職員全員の共通認識としておくことが必要と考え、敢えてご紹介した次第です。



ここで教職員の皆さまにお願いがあります。「FD、次のステージへ」というタイトルに込めた思いでもあります。内向き志向による工大FDのガラパゴス化を避けるために、学外で行われているFD活動に積極的に目を向けていただきたいと思います。摂南大学や広島国際大学での取組みを知れば、新たに気付かれることがあるでしょう。さらには、このギョーカイの関西の総本山「関西地区FD連絡協議会」が開催する関係イベントにも是非ご参加下さい(「関西FD」検索をクリック一発で同協議会HPにアクセスできます!)。そして、何かに気付かれたこと、何かを体験されたこと、何かで刺激を受けられたこと、などをご自身から教職員に向けて発信していただきたいのです。教務部では、そのような獲得情報の水平展開の機会を設けることも視野に入れて、次のステージのFDを進めてまいりたいと考えております。

ところで、教務部が抱え込んでいる案件は「ホンマにぎょーさん」あります。喫緊の課題は、PBL科目や英語教育強化のためのオープンスペースの整備です。すなわち、ワークショップやプレゼンテーション、e-Learningなどの自学自習を行うことができる、視聴覚機材設備の整った学部学科共同利用スペースが必要であると考えております。現状は、大宮校地のLanguage Learning Center以外のLearning Commons的施設は皆無に等しいわけですが、関係部署にその必要性をアピールし、ご理解を得てまいりたいと思います。

最後に、大宮校地における教務関係部署の改組についてお知らせいたします。この4月から工学部事務室および知的財産学部事務室の教務担当部門を同事務室から切り離し、教務部教務課で分掌することになります(枚方校地における改組はありません)。所在ですが、まず、7号館3F工学部事務室が7号館11Fに移転し、3F跡地には教育センターと資格サポートコーナーが移動いたします。教務部教務課は7号館2Fの旧教育センター跡地に移動しますが(旧教務課の場所には会計課が移動してきます)、同フロアには従来通り学生部がありますので、ここで教務・学生・会計事項に関する「学生に対するワンフロア・サービス」がなされることとなります。この改組は、スリムで無駄がなく、よりスピーディで、かつ、適正・正確な処理・判断を行える組織へ、ということを目的に行われます。また、学生支援、教育支援、研究支援をさらに充実させること、さらに、教員が教育研究に注力できる環境を整備することを目指しており、FDの一助となるものと言えます。

改組直後の混乱を避ける最大限の努力はいたしますが、教職員の皆さまには改組の主旨をご理解いただき、特に3Fに移動する教育センターへの学生の積極的な誘導など、温かいご支援を賜りますようお願いいたします。

FDフォーラムを開催しました！

第2回(通算16回)1月25日開催



今回は京都大学 高等教育研究開発推進センター長・教授 大塚雄作氏に「主体的な学びと大学教育の質的転換—中教審答申と教育実践の現実の狭間で」をテーマにご講演いただきました。

講演では、まず高等教育政策等の動向と法的背景について説明があり、つづいて2012年8月の中央教育審議会答申および大学が速やかに取り組むことが求められる事項について、分かりやすく詳細にご解説いただきました。

さらに、「FD奮戦記」として、授業改善とは何か、を掘り下げてお話しになった中で、

- FDは教員の個性をつぶすものであってはならない
- 大学教育はPDCAサイクルだけではない
(研究などにおいて、必ずしもPは存在しない)
- Active Learningを引き出すことは重要だが、受身的な授業も必要であり、そのバランスをよく考えなくてはならない

と強調され、155名にのぼる参加者は熱心に聞き入っていました。

参加者アンケート紹介(抜粋)

【感想】

- 講義のむずかしさが大変良くわかった。個人の個性を活かした、全体としてのFD活動が望ましいとの発言は共感できる。
- 2012年中教審答申の概略を理解でき、ねらいと問題点を知ることが出来た。Active Learningについて考える機会を得た。
- 大学教育をめぐる新しい知見が得られた。授業改善に取り組む意欲が高まった。
- アクティブラーニングなど、学生に興味をもって、深い理解を与える手法のヒントが得られた。
- カリキュラム改善にむけて、重要な情報が得られたと思います。
- 現場の教員の視点に立ってお話し下さったので良かったです。また、中教審や法律的な理解も多少深まって良かったです。
- 答申の内容について、知っておくべきだったので このような機会を得られてよかったです。
- 経験豊かな先生でも、授業の改善で多くの工夫をされていることがわかりました、見習いたいと思いました。「これでいいと思った瞬間が最も危ない!!」を思い出して改善します。ありがとうございました。
- 日々の授業に即したお話で納得のいく点が多かったです。毎回の授業でアンケートを実施すると飛躍的に情報の豊かさが増すことが分かりました。(因果が分かりやすい)
- 個人的にいつも考えていた授業の方法に対するヒントがいくつか得られたような感じがしました。
- 日常、授業を実施する中で感じる難しさに関連した内容でしたので、非常に興味をもって聞くことができました。FDについても「こうすれば良い」というのは無く、常に学生の意見、情報をモニターしながら、日々改善し続けるということに納得しました。
- 評価、統計などに惑わされ、教育・学修自体が画一化している印象は常にありました。教員の個性ならびに学生の個性も失われ、ダイナミックな部分が少なくなっている理由が今日のお話で分かった気がいたします。授業も色んな面から検討する必要性を覚えしました。

- 大塚先生の体験談が参考になりました。教育における両面的な部分、複雑な部分を重要視されている事に共感を覚えました。
- マクロな視点からの制度や考え方の解説、統計データ、実態などが丁寧に示されていて、わかりやすかった。また、実感に近いデータでもあった。こういった情報を個人、組織も含めどう解釈、評価、活用していくかの議論が必要であると感じた。

【FDフォーラムについて今後の要望】

- 海外の取組み事例など、グローバルな講演テーマもお願いします。
- 講義、演習時間外で学生に学習をさせるためには、どのようにすればいいのか、という事をテーマとして頂けると助かります。
- 総論的な話より、具体的なとりくみの例をもっと示してほしい。
- 英語、数学、物理、etc.の専門家が学生にどのように教育しているかを知りたい。専門ごとに教育法について示せる方の講師にして欲しい。
- 授業の実例を示して、うまくいったこと、うまくいかなかったことを検証するような内容を期待する。
- 本学に近い規模・状況の大学の先生で、FD活動をされている方のお話を伺う機会があれば有難いと思います。自発的学習(学修)能力の極めて低い学生を相手に行う授業について議論できたら良いと思います。
- 最新情報(答申等)や他大学の取り組み、全国の大学の傾向について知りたいと思います。
- 授業改善の組織的な取組み(分業体制も含めて)の事例がもしあればお聞きしたい。
- 大人数授業でも学生の満足度を高められるような授業を実践するにはどうすればいいか。そうしたノウハウを持った先生からご講演頂きたい。
- 参加者アンケート回答率
75%(アンケート提出者数 117名/出席者数 155名)
- テーマ設定についての満足度
良い=66% まあまあ良い=27% 普通=5% やや悪い=1%
未回答=1%

英語クラス(教職員対象)を開講しました

Language Learning Centerで後期授業期間に工大教職員を対象とした英語クラスを開講しました。「Beginner Class」「Intermediate/Advanced Class」の2クラスを開講し、教職員46名が受講しました。出張や会議等の業務のため15週すべてを受講できた方は約半数ほどになりましたが、教員と職員が同じクラスで学んだり、英語のみで相互にやり取りを交わしたり、と新鮮で楽しいクラスとなりました。

FDフォーラムに参加して



工学部
都市デザイン工学科
教授 田中 一成

蛙の話は、とても面白い事例です。多くの学生が興味を持たない蛙（わかる気がします）を対象とした授業で一部の学生だけが興味を持って学び、さら

にその学生たちが主導して、解らない学生たちを指導したという話題でした。ただ楽しいだけの授業ではだめという、奥の深い話でした。

「主体的な学び」という方法を学び、この学び方はさまざまあってよく、その結果学ぶべきものを多くの受講生が学ぶ。結局「学修」の正解はわかりませんでした。多様性と主体の本質がどこにあるかという話は引き込まれる内容でした。

多様性という言葉は簡単に使われますが、学習意欲を生み出している個人的背景が多様であって教育ではこれを壊さないこと、大塚教授が指摘されていた学生それぞれの個性をつぶす方向に行きつつある教育の方向性をただす必要があるということ、これは確かに大切なことだと気づきます。基礎の数学では正しい解答と解法がありますが、担当する専門科目のなかでも、もしかしたら皆に同じ解答と解法だけを教えているかもしれません。

大学教育は必ずしも一律に PDCA サイクルの P があるわけでは

ないという話がありました。これも、言われてみると共感できる話です。「学ぶ側」は、実践から始まるスパイラル構造で主体的に学び、多様性を維持していくのでしょうか。

もうひとつの興味深い事例は、毎回の授業形態によって学生の興味が変わるとする調査結果です。この結論は、授業に対して低い評価が続くのは困るが、授業評価が高くなれば単純に「改善」と言えるかという、そうではない。高い時があればその分低いときが出てくる。時間的な比較が学生個人の中で起こっている、ということでした。評価のばらつきも授業によって大きく異なるのかもしれませんが、授業形態は、各時間に学ぶものによって異なると考えられます。学ぶために考える技術を学ぶ授業は、小学校の授業を思い出します。これが今足りないといわれると、確かにそのような気がします。

興味の無い話、興味があっても面白くない話をただ聞くだけでは、学生でなくても眠くなります。シンポジウムや会議でも、年齢や立場を問わずに起こる現象だと思えます。それら全てが悪いこととは言えないと思っていましたが、聞き体験しながら新しいものを生み出す技術を我々も求められているのでしょうか。

これは、教育の本質の問題だと指摘されています。児童や生徒の多くは自分や仲間という異なる意味で異なる友達を受け入れないことが多く、ここを乗り越えた先にあるべき教育が大学教育であるはず。しかし、実は大学は、社会を変える人材を育てるところか、社会でそのしゅみにしたがうところに学生の多様性と創造力を押し込めてしまっている、ということなのかとぼんやりと考えながら（もしかしたら思考方法の多様性を認められていたのかもしれませんが）時間が過ぎた講義でした。ありがとうございました。



情報科学部
情報システム学科
教授 深海 悟

今回の御講演で最も印象に残ったことは、「FD はともすれば教員個人の頑張り」に期待する向きがあるが、組織的取組が重要だ」との指摘でした。という

のも、私の専門領域であるソフトウェア工学においても全く同じだからです。

ソフトウェア開発の現場では、常に生産性、品質の向上が求められています。この要求に応えるためには、「People, Process, Technology」の3点セットが重要であると言われています。People すなわち開発者個人のスキルアップ、Technology すなわち新しい開発技術の導入が重要であることは誰でもわかります。しかしこれだけでは対応が困難で、Process、すなわち、仕事のやり方、マネジメントのしかたの継続的改善が必要です。そして最終的には、改善のための仕組みそのものをプロセスの中に取り込んでしまうことが重要です。またこれを行うためには、組織として様々な計測データを積み上げ、定量的データに基づく判断の積み重ねが前提となります。

教育においても、教員個人の技量をあげること、新しい教育手法を学んで導入することは当然必要でしょう。しかし従来の FD はこの部分に終始していたのではないかと印象を持っています。もちろんこれは欠かせないことではありますが、個人レベルで PDCA を回すだけ

では限度があります。

例えば、最近入学生のレベルが年々下がっているということが教員間でよく話題になります。もしそうなら、毎年教育内容・方法を変更する必要があるでしょう。しかし、レベルが下がっているというのは単なる印象でしかなく、どのような能力がどの程度低下しているかについての客観的計測データが存在するわけではありません。

また、教育内容・方法を変更するかしないか、何をどう変更するかは教員個人の試行錯誤に任されており、組織としてノウハウが蓄積されているわけではありません。たとえ誰かがある方法を導入してうまくいったという話があっても、対象学生、分野が異なれば別の教員が安易にまねをしてうまくいくものでもありません。

さらに、学生間のばらつきが大きい場合、習熟度別クラス分けの導入も必要でしょう。しかし、どのような場合に分ければいいのか、分ける基準をどうするのか、それぞれのクラスではどのような教え方が適切か、といったことについて組織としてのノウハウがないまま各教員が個別に導入しても効果を上げることは難しいでしょう。

もちろんこのようなノウハウは一朝一夕に得られるものではありません。しかし、少なくとも組織として継続して様々な計測データを収集・分析する活動なしにこのようなノウハウを得るのは難しいと思います。教員が個人レベルでPDCAを回したところで、経験できる範囲、得られるデータは限られるからです。

組織を挙げて計測し、得られたデータを集約して分析することは、改善のためのスタートラインでしかありません。また教育においては、何をどう測るかについてもコンセンサスが容易に得られるとも思えないので、スタートラインに立つことすら難しいかもしれません。しかし、まずこれらを行い、現状を正しく理解することなしには教育改善は難しいのではと感じた次第です。

2012年度後期に実施した授業アンケートの概要と集計結果を報告します

【実施科目数等】

区分	第1回目(中間)：2012年10月中旬～11月上旬(授業5・6回目)				第2回目(期末)：2013年1月上旬～下旬(授業14・15回目)			
	科目数	履修者数	回答者数	回答率(%)	科目数	履修者数	回答者数	回答率(%)
学部	1,423	67,845	36,953	54.5	1,427	67,852	35,523	52.4
大学院	116	917	534	58.2	117	919	565	61.5
総計	1,539	68,762	37,487	54.5	1,544	68,771	36,088	52.5

【設問項目】

設問	第1回目(中間)設問内容
問1	これまでの授業において良かった点を記入してください
問2	今後の授業において改善してほしい点を記入してください

【第2回目答項目】 Aパターン 5：100% 4：80%～100%未満 3：60%～80%未満
2：40%～60%未満 1：40%未満
Bパターン 5：大変そう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない
2：そう思わない 1：まったく思わない
Cパターン 5：大変よかったです 4：よかったです 3：時々よかったです
2：あまりよかったです 1：まったくよかったです

設問	回答項目	第2回目(期末)設問内容
問1	B	この授業の進め方や到達目標について説明がありましたか
問2	A	この授業にどの程度出席しましたか
問3	B	この授業に意欲的に取り組みましたか
問4	C	この授業の復習をしましたか
問5	B	この授業の到達目標を達成できましたか
問6	B	この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか
問7	B	この授業は学生の理解度を配慮しながら進められましたか
問8	B	この授業の教員の声や発音は明瞭で、聞き取りやすかったですか
問9	B	この授業で黒板やスクリーンの図や文字は見やすかったですか
問10	B	この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか
問11	B	総合的に考えて、この授業を受講してよかったですと思いますか

※大学院知的財産研究科を除く

【第2回目アンケート集計結果】 ※大学院を除く

学部	学科等	科目数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11
工学部	共通科目	325	4.13	4.51	3.99	3.19	3.81	4.07	3.94	4.14	4.01	4.12	4.04
	都市デザイン工学科	41	4.07	4.42	4.03	3.47	3.81	3.99	3.79	3.89	3.79	3.97	3.98
	空間デザイン学科	47	4.06	4.28	4.02	3.31	3.71	3.97	3.82	3.93	3.88	4.07	4.06
	建築学科	56	4.14	4.39	4.01	3.39	3.72	4.06	3.84	4.05	3.91	4.14	4.08
	機械工学科	106	4.10	4.58	4.11	3.45	3.88	4.01	3.84	3.98	3.90	3.96	4.04
	ロボット工学科	36	4.23	4.75	4.05	3.37	3.76	4.11	3.86	4.15	3.99	4.06	4.10
	電気電子システム工学科	46	4.09	4.53	3.98	3.31	3.71	4.02	3.78	3.98	3.82	3.97	3.99
	電子情報通信工学科	63	4.11	4.64	4.04	3.50	3.79	4.04	3.82	3.98	3.91	4.03	4.02
	応用化学科	49	4.25	4.60	4.04	3.33	3.73	4.12	3.87	4.10	3.98	4.12	4.07
	環境工学科	39	4.12	4.57	4.10	3.56	3.86	4.10	3.90	4.06	3.92	4.08	4.08
	生命工学科	35	4.03	4.67	4.00	3.20	3.69	3.92	3.71	3.93	3.78	3.93	3.95
	技術マネジメント学科	19	4.42	4.14	4.35	3.77	4.10	4.30	4.29	4.43	4.31	4.31	4.31
	生体医工学科	36	4.29	4.05	4.06	3.20	3.73	4.14	4.03	4.12	4.00	4.15	4.09
情報科学部	共通科目	99	3.90	4.37	3.79	3.01	3.63	3.82	3.74	3.88	3.76	3.89	3.82
	コンピュータ科学科	69	3.98	4.39	3.82	3.18	3.58	3.87	3.67	3.89	3.80	3.89	3.83
	情報システム学科	72	4.06	4.37	3.87	3.26	3.60	3.97	3.68	3.98	3.88	3.91	3.91
	情報メディア学科	74	3.96	4.49	3.91	3.27	3.68	3.98	3.70	3.85	3.80	3.92	3.87
知的財産学部	情報ネットワーク学科	61	3.97	4.30	3.85	3.31	3.62	3.88	3.67	3.90	3.79	3.83	3.79
	基礎教育科目	81	4.13	4.22	4.06	3.59	3.86	4.07	4.01	4.11	3.97	4.10	4.05
	知的財産学科	36	4.15	4.17	4.02	3.48	3.82	4.06	3.92	4.03	3.99	4.02	4.02
	教職科目	37	4.32	4.43	4.22	3.23	4.01	4.20	4.20	4.36	4.25	4.36	4.30
	平均(合計)	1,427	4.09	4.46	3.98	3.29	3.75	4.01	3.84	4.02	3.91	4.02	3.99

大宮キャンパスの改組をお知らせします

2013年4月から、大宮キャンパスの教務部門の組織・事務分掌は次のように変わります。

現行		2013年4月から			
教務部教務課	7号館2階	⇒	教務部教務課	7号館2階	教務事項全般を担当
工学部事務室	7号館3階				
知的財産学部事務室	1号館8階				
教務部教育センター	7号館2階	⇒	教務部教育センター	7号館3階	2階から3階に移動
資格サポートコーナー		⇒	資格サポートコーナー		

※学部事務室は4月以降も組織として存続しますが、教務事項は担当しません。

～FD NEWSを教職員の情報共有にお役立てください～

学部・学科・小グループ・個人での取り組みや活動をFD NEWSに投稿してください。
授業運営上の悩みを解決した方法などがあれば情報共有していきましょう。

【お問合せ先】

大阪工業大学教務部教務課
TEL.06-6954-4083
FAX.06-6954-4049
kyoumuka@ofc.oit.ac.jp